

多言語を知る、触れる、そして活かす

理事 迫田 久美子

最近、時々「退職したので、海外で日本語を教えたい」という相談を受けます。その度に、私は「日本人だからと言ってすぐに日本語が教えられるわけではない。」と言い続けてきました。多くの日本人は、日本語が話せるのだから、日本語は教えられる…とされているようです。

母語話者(日本人)は、母語(日本語)を客観的に学んだ経験がなく、言語を意識し始めるころには、母語(日本語)は既に身につけているので、何が難しいのか、どう説明したらいいのか、を考える機会がありません。例えば、「ビールがよく冷えるために冷蔵庫に入れる」は間違いで、「ビールがよく冷えるように冷蔵庫に入れる」が正しい。では、「ために」と「ように」はどう違うのか…と質問されても、すぐには回答ができません。「ために」は「冷やす」のような話者の意思でコントロールのきく意思動詞に使われ、「ように」には「冷える」のような話者の意思ではコントロールのきかない無意志動詞に使われる、という説明ができる日本人がどれだけいるのでしょうか。

日本人が日本語を外国語として教える場合、日本語を客観的に観る能力が必要になります。日本人はどうしてお礼を言う時に「すみません」と言うのか、「ありがとう」とどう違うのか…という質問に対しても、色々な事例を考え、母語を分析するチカラが必要となります。そのためには、より広く、より多くの言語を知ることが重要になってきます。特に、日本語を教える日本人は、教える相手の学習者がどのような言語を母語としているのか、さらに、その言語の背景にどんな文化が存在するのかを知ることが大事なのです。

日本語を教える日本人は、日本語以外の多様な言語、外国語に触れる姿勢が必要です。英語だけでなく、その他の外国語に触れることによって、また、その他の外国語の教師との交流から、新たな理解、新たな発見が生まれます。そして、その新たな理解や発見が、日本語の指導に活かされていくのだと思います。

JACTFL は、さまざまな言語を外国語として教える先生方の連携を図り、互いの情報交換を行いながら、多言語を知ることの意義、多言語を学ぶ大切さを伝え、そしてそれらを互いの言語教育に活かす活動へ結びつけていくことを目指す人々の集まりだと思っています。この度、その種が蒔かれ、みんなで育てていくことになりました。これから多くの仲間を増やし、その仲間たちと共に、水やりをしながら、JACTFL の芽を大きく

育てたいと思います。

(国立国語研究所)